

へいせい ねん だい ごう そんがいばいしょうせいきゅうじけん
平成15年(ワ)第21846号 損害賠償請求事件

げんこく さとう たきさぶろう
原告 佐藤瀧三郎

さとう ようこ
佐藤 陽子

ひこく しゃかいふくしほうじんとうきょうとしゃかいふくし じぎょうだん
被告 社会福祉法人 東京都 社会福祉事業団

ちんじゆつ しょ
陳述書

へいせい ねん しがつ にち
平成16年4月15日

とうきょう ちほう さいばんしょ みんじだい ぶ おんちゆう
東京地方裁判所 民事第14部 御中

じゅうしょ
住所 * * * * *

しめい さとう ようこ
氏名 佐藤 陽子 印

わたし さとう たきさぶろう けっこん あと しょうわ ねんはちがつ にち ちょうなんえいいち しょう
1. 私は、佐藤瀧三郎と結婚した後、昭和38年8月21日に長男 栄一を、昭
わ ねん にがつ にち じなん すすむ しょうわ ねん にがつ にち ちょうじよぶさこ
和43年2月23日に次男である 進を、昭和44年2月17日に長女 房子を
しゅっさん
出産しました。

こんかい すすむ にゅうしょ ななお ふくしえん にゅうよくちゆう できし
今回、進が入所していた七生福祉園で入浴中に溺死したことは、いまだに
しん きも
信じられないという気持ちです。

ちてき しょうがいしゃ にゅうきよせつ ななお ふくしえん すすむ あんぜん じゅうぶん
知的障害者の入居施設である七生福祉園では、進の安全についての十分な
みまも たいせい ととの げんいん かんが
見守り体制が整っていなかったことが原因であるとしか考えられません。

すすむ せいご かげつ こうねつ けいれん はっせい ちてきしょうがい
2. 進は、生後6ヶ月ごろ高熱による痙攣が発生したことによって知的障害を
もつようになりました。

すすむ あだちくない しょうがっこう とくしゅがっきゅう かよ そつぎょうあとあだちようごがっこうちゆうとうぶ
進は、足立区内の小学校の特殊学級に通い、卒業後足立養護学校中等部
にゅうがく
に入学しました。

そのご すすむ あだちようごがっこうこうとうぶ がくねん とちゅう ななお ふくしえん にゅうしょ
その後、進は、足立養護学校高等部2学年の途中で七生福祉園に入所する
ことになりました。

わたし すすむ しょうがっこう じだい きんじよ こども すすむ
私は、進が小学校時代から近所の子供たちのいじめにあっていたこと、進

の自立した生活のためにどうすればよいのが悩んでいたことを足立区の福祉事務所で相談していたのですが、福祉事務所での相談の結果としてこのまま地域での生活を続けていくよりも、施設に入所したほうがよいだろうということになり、進が七生福祉園に入所することになりました。

3. 入所後、進は、入所後毎年3回から4回くらいは帰省していました。

年末年始、コールデンウィーク期間中、お盆の期間中です。このときは、長男の栄一が進と一緒に生活して、進の生活を援助しておりました。

4. 進の状態として時々眼球が上向きになってしまう発作が出たのは平成8年ころからであったと記憶しています。

進は、幼少時にてんかんと診断されたこともありますが、てんかん発作が最後に起きたのは、小学生のときであり、その後てんかんの症状はありませんでした。

私は、進の眼球上転発作がどうしてこのときから起きようになったのかその原因を知りたかったのですが、だれからも説明を受けたことはありませんでした。

進氏が入所した後、少なくとも月に一度くらいは私か夫のどちらかが進と面会に行っていました。

平成13年度及び同14年度は、私は、私の仕事場が新宿であり、土曜日は午前中で仕事が終わるため、毎月1回くらいの割合で土曜日に仕事を終えてから進の面接に向かっていました。

私が面会に行った際は、進と午後1時30分ころ高幡台団地バス停で待ち合わせしてバスで高幡不動駅まで行き、京王ストアで本やCDの買い物をし、ファミリーレストラン等で食事してから園まで送ってゆくというパターンでした。この間、大体5時間くらいでした。

かいもの 買ったし すすむ す か
買い物については、私 は 進 の好きなものを買ってあげたかったのですが、
ななお ふくし えん しょくいん か せいげん
七生福祉園の 職員 から買ってよいというものが制限されておりましたので、
しじ したが すすむ かいもの せいげん
その指示に従って 進 の買い物を制限していました。

そして、かいもの お
買い物を終えてから、ファミリーレストランで 一緒に 食事 をしま
した。わたし すすむ ななお ふくし えん しょくじ
私は、進 は七生福祉園での 食事 があるので、進 の 体 の 調子 を 考 え
て、ようす み しょくじ ちゅうもん
様子を見ながら 食事 を 注文 していました。

しょくじちゅう かい かいじょう わりあい すすむ がんきゅうじょうてんじょうたい
その 食事 中、2回に1回以上の割合で 進 が 眼球 上 転 状態 となってい
ました。そのときは、すすむ がんきゅう うわむ ふん じょう かく
進 の 眼球 が上向きになり半分くらい 上 のまぶたに隠れ
るような じょうたい じょうたい はな はな
状態 になり、それまでいろんなことを話していてもまったく話さなくな
るような じょうたい
状態 でした。

すすむ かお したむ なん じぶん しょくじ つづ ふつう
このとき、進 は、顔を 下向き にて何とか自分で 食事 は 続ける ものの、普通
の じょうたい
状態 であればよだれを垂らして 食べる ことは ない のですが、よだれを 出し
ていました。わたし ひんばん すすむ くちもと ふ しょくじ えんじょ おこな
私は、頻繁に 進 の 口元 を 拭いて 食事 の 援助 を 行 いました。

わたし すすむ た ごちそう に あんしん
私は、進 に「あわてて 食べなくてもいいよ。ご馳走は逃げないから 安心 し
て 食べて」と話しかけても、すすむ わたし ことば はんのう きょくたん くび
進 は 私 の 言葉 には 反応 せず、あごを 極端 に 首
にひきつけて 夢 中 になって 食べ物 を 口 に 運 んで いました。

わたし がんきゅう うわむ つうじょう いしき じょう
私は、眼球 が上向きになって 通常 の意識 があるの かない のかわからない 状
きょう すすむ かわいそう
況 になる 進 が 可哀想 でありませんでした。

すすむ しょくじ お あと き
また、進 は、このような 食事 を 終えた 後に、決まって トイレ に 行 きました。
わたし すすむ しんぱい だんし はい すすむ ようす
私は、進 が 心配 だったため、なりふりかまわず 男子 トイレ に 入 って 進 の 様子
を 見て いました。さいしよすすむ しょうべん き しょう そのご ようしき こしつ はい
最初 進 は 小便 器 を 使用 して、その後 洋式 の 個室 に 入 っ
て いました。わたし なんと はや で すすむ はな すすむ へんじ
私は、何度も 早く 出 なさいと 進 に 話 しかけましたが、進 の 返事
かえ
は 返 っ て 来 ません でした。そして、10分 から 20分 くらい の 間 に や っ と 進
は トイレ から 出 て 来 ました。このときも、すすむ がんきゅう うえ む
進 の 眼球 は 上 を 向 いた まま でした。

わたし すすむ ころ けが すすむ うで いっしょ ある
私は、進 が 転 んで 怪我 を しない よう に と 進 の 腕 を と っ て 一 緒 に 歩 き ま
した。ファミリーレストランの 階段 を 手 を 取 っ て 一 つ 一 つ 教 え な が ら 降 り て ゆ

きました。

眼球^{がんきゅうじょうてん} 上^ま 転^{すすむ}の前^{つづ}までは 進^{すすむ}はおしゃべりを 続^{つづ}けていましたが、 全^{まった}くしゃべりません。 私^{わたし}は、 進^{すすむ}がとても辛^{つら}かったのだらうと思^{おも}い、 私^{わたし}も辛^{つら}くなりました。 その^{そのご}後^{わたし}、 私^{わたし}はバスを待^まつ間^{あいだ} 進^{すすむ}をベンチに腰^{こしか}掛^かけさせていました。 高^{たか}幡^{はた}台^{だい}団^{だん}地^ちバス停^{ばすてい}についてから 七^{なな}生^お福^{ふく}祉^し園^{えん}に向^むかうまでの 間^{あいだ}もず^{すすむ}つと 進^{すすむ}の手^てをとっ て歩^ほ道^{どう}を歩^{ある}きました。 私^{わたし}は、 眼^{がん}球^{きゅう} 上^{じょう} 転^{てん}によ^よって 進^{すすむ}の注^{ちゅう}意^い力^{りき}が散^{さん}漫^{まん}にな^なってお^おり歩^ほ行^{こう}も普^ふ段^{だん}と違^{ちが}ってす^{すり}り足^{あし}にな^なっていたた^ため、 歩^ほ道^{どう}を踏^ふみ外^{はず}して車^{しゃ}道^{どう}に転^{ころ}げ落^おちることや、 自^{じてん}転^{しゃ}車^{しゃ}や人^{ひと}にぶ^ぶつか^かることなどが心^{しん}配^{ぱい}でしたので、 進^{すすむ}の手^てを離^{はな}しませんでした。

七^{なな}生^お福^{ふく}祉^し園^{えん}に到^{とう}着^{じつ}して^{ほう}から、 当^{しやく}日^{いん}の報^{ほう}告^{こく}を職^{しやく}員^{いん}にするの^{じよ}です^{せい}が、 女^{じよ}性^{せい}の職^{しやく}員^{いん}から「目^めが上^あがっているほうがお^おとなして助^{たす}かる」などとい^いわれたことがあ^ありました。 私^{わたし}は、 なんとい^いうことを言^いう人^{ひと}だらうとび^びっく^くりしま^ましたが、 進^{すすむ}がお^お世^せ話^わにな^なっているとい^いうことがい^いつも頭^{あたま}のな^なかにあ^ありましたので、 特^{とく}に反^{はん}論^{ろん}する^{する}こともなく、 進^{すすむ}を預^あず^ずけて園^{えん}を後^{あと}にしま^ました。

5 . 私^{わたし}は、 平^{へい}成^{せい}15年1月8日^{ねんいちがつようか}に、 進^{すすむ}に緊^{きん}急^{きゅう}事^じ態^{たい}が起^おきたとい^いう夫^{おと}から^{でん}の電^{でん}話^わによ^よって事^じ故^こを知^しりました。

す^すぐに夫^{おと}と転^{てん}送^{そう}先^{さき}の花^{はな}輪^わ病^{びょう}院^{いん}へ向^むかい、 午^ご後^ご8時^じころ到^{とう}着^{ちやく}しま^ました。 職^{しやく}員^{いん}の木^き村^{むら}さん^{むら}が私^{わたし}たちに向^むかっ^かて「お父^おさん、お母^おさん、ごめ^ごんなさい」と言^いってき^きました。 私^{わたし}たちが、 どうしたのと問^とい^いかけてもごめ^ごんなさいと繰^くり返^{かえ}すだけ^{だけ}でした。

そのあ^あとす^すぐに 進^{すすむ}にあ^あった^たので^{ので}すが、 既^{すで}に死^し亡^{ぼう}して^{して}いた 進^{すすむ}の体^{からだ}は硬^{かた}くな^なって^ていま^ました。

私^{わたし}たちはと^とても動^{どう}転^{てん}して^{して}いま^ました。 医^い師^しなど^{など}から^{から}は「手^てを^を尽^つく^くしま^ましたが 残^{ざん}念^{ねん}で^でした」とい^いう言^いわれただ^{ただ}けで死^し因^{いん}につ^ついての詳^{くわ}しい説^{せつ}明^{めい}や解^{かい}剖^{ぼう}の必^{ひつ}要^{よう}性^{せい}など^{など}の説^{せつ}明^{めい}はあ^ありま^ません^{せん}で^でした。 病^{びょう}院^{いん}の看^{かん}護^ご婦^ふから「解^{かい}剖^{ぼう}しま^ますか」と2

かいくりかえ き わたし どうてん はや すすむ いえ
回繰り返して聞かれたのですが、私たちは動転しており、早く進を家につれ
かえ おも あたま かいぼう
て帰ってあげたいという思いしか頭にはありませんでしたので、解剖はしない
むね かんごふ つた
旨を看護婦に伝えました。

わたし すすむ いっさい いし かんごふ はな
私たちは、進がてんかんであったことなど一切医師や看護婦に話しをして
おらず、すすむ じゅうぜん しょうがい し いし ほっさ いしきしょうがい
進の従前の障害などを知らない医師がてんかん発作による意識障害
できし げんいん ななお ふくしえんがわ いし むね はな
を溺死の原因としているのは、七生福祉園側が医師にその旨を話したからと
かんが
しか考えられません。

わたし かぞく ちてき しょうがいしゃせんもん しせつ あんしん すすむ にゅうしょ
私たち家族は、知的障害者専門の施設ということで安心して進を入所さ
すすむ じょうたい じゅくち しせつ にゅうよくちゅう できし
せていたのですが、進の状態を熟知しているはずの施設で入浴中に溺死す
しん すすむ ひつよう えんじょ い すすむ たんどく
るなど信じられません。進に必要な援助を行っていたのであれば、進を単
にゅうよく すすむ し おも
独で入浴させることはなかったし、進が死んでしまうことはなかったと思います。

いじょう
以上